

ヴァン＝マーネンの教育学（1） —現象学との出会いとシスケとの邂逅—

村井 尚子

はじめにかえて

ヴァン＝マーネンは1942年にオランダの Hilversum¹⁾ で生まれ、国立教育学アカデミーでランゲフェルト (M.J.Langeveld, 1905-1989) やボイテンダイク (F.J.J.Buytendijk, 1887-1974) の現象学を学び、K-12までのすべての段階の教員免許を取得した。専門は中等教育の第二言語としての英語教育の教員免許である。

彼は、オランダに帰国した際に、子どもの頃に大切に読んでいた小説『ならず者シスケ²⁾』を入手し、カナダに持ち帰って読み返したことを綴っている。

オランダに帰省していたとき、私は苦勞してオランダの小説家ピエット・バッカーの三部作の、黄ばんだコピーを手に入れた。もう今は絶版になっている、古本屋からとりもどしたこのコピーを開くと、両親が持っていた本と同じような匂いがうっすら感じられた。私が思春期に入った頃、この本は既に古本になっていた。年を重ねたページには母の手に有ったシミと同じような茶色のシミがあった。乾いた、破れそうなページをめくると不快でない黴臭いにおいが漂ってきたのを思い出した。古びた紙ごみのもつわずかな匂いと乾いた糊が、シスケとその教師の人生の物語に属しているようだ。この物語は私の子ども時代の一部でもある。しかし、この物語によってまた私は自身が年を取り、自分自身の子どもの若い頃のことを思うと、自分が死すべき運命に有るということにも対峙させられる。そしてこの本のページにざっと目を通し、若かった学生時代の思い出が瞬く間によみがえる。なぜこの本が私に訴えかけたのか？³⁾

本名のシスケではなくラットという呼び名でしか呼ばれないこの主人公の少年との「出会い」が、ヴァン＝マーネンをのちに教育学の道へと導いたと言えるかもしれない。転校した時点でシスケは、「すでに犯罪に手を染めているという噂があり、出所したり収監されたりを繰り返している」と校長から「紹介⁴⁾」されている。

この子ども、シスケは謎の人物である。彼は本来的に異邦人であり、大人はこの子

どもを理解することが出来ない、この子に対してどうすればよいのかがわからない、大人はそういった戸惑いをもつ。この子は底の知れない、途方に暮れる、野生動物のようなものと理解されていた。でもこういった子どもは大人の世界の産物なのだ。もう子どもの問題に十分に関わっているのだということに大人は気がつかない⁵⁾。

シスケの担任になったのは、新任の教師ブルースである。ブルースは、シスケに対して高圧的な態度で屈服させようとする、校長をはじめとする教師たちの態度に反発する。シスケに何とかして寄り添おうとするブルースの奮闘は、ヴァン＝マーネンの教育観に近似している、あるいはその土台となっているとも考えられよう。教育の場において、教師にとってどうするかわからない、何が最善なのかを決めてくれる唯一のマニュアルやディシプリンのないところで、それでも、教師は子どもにとって善い（と思われる）行為を行っているのである。

シスケの小説の始まり。それは「未来のない子ども」の生活世界への旅だ。少なくとも私自身が子どもとして、非行や犯罪を犯すだろうという以外の未来を想定し得なかった子どもの生活世界へのである。そして、残りの部分は教育についてのスリラー小説として読まれ得る。どのようにして教師は、生を欠いた子どもの人生を変えることができるのだろうか。すでに人生に生きる価値を見出せず、それゆえ未来に何の希望をももたない子どもがそこにいる。そこにいるシスケに対して、何と話しかけるのか、どのように話しかけるのか、そして彼の（未来のために）善いことを、どうやって行うのか。教師に告げてくれる知のルールも原理も、そこには何もない⁶⁾。

オランダの市街地で育ち、小学校生活を送っていた彼のクラスには、幾人かの「シスケ」がいたと彼は回顧している。彼は、5年生の時にこの書物を両親の書棚から自分のベッドのそばにある書棚へと持ち込み、何度も何度も繰り返し読んだ。12歳の彼は、「家でも学校でも誰からも愛されない」と感じられた彼らに対して憐みの感情をもっていた。そして「彼らを取り巻く貧困や虐待、ネグレクトによって彼らが痛めつけられること」に対して、自分が冷淡になり、免疫力を身につけてしまうことへの恐れを抱いていた⁷⁾。そして、その状況を、子ども達が未来に希望をもてないその状況を何とかしたいという熱望が、彼に教師を志させたという。

シスケの三部作を読んで、私は教師になりたいと思った。子どもの人生を変えたいと思った。しかし、私はそのとき12歳のまだ子どもだった。子どもが他の子どもの幸せについて教育的な関心を抱くことが出来るのか？ 子どもなりに、私はシスケとのケアリングの関係を築くことが出来ると信じていた。けれどもその関係は読書の上で

の経験だ。今でもまだ説明することの出来ない何かを私は理解していた。シスケの物語は私に話しかけてきたが、なぜそれほど訴えかけるものがあるのか分からなかった。それはただ私に「話しかけて」きた⁸⁾。

1. ヴァン＝マーネンの来歴

教員免許を取得後、彼は1年間 Hilversum の学校で教師を務めた。本人の記述によると、自分が卒業した同じ小学校に就職したという。その後、1967年にカナダに渡り、アルバータ州のエドモントン・パブリックスクールで3年間教師生活を経験している。筆者自身の本人へのインタビュー⁹⁾によれば、当時オランダにおいては徴兵制度が義務化されており、平和主義者である彼は、軍隊に属することを避けるためにカナダへと渡ったのだという。

現職教員の経験ののち、アルバータ大学教育学部で1973年に PhD. を取得した。1973年から1976年にかけてはトロント大学で助教授、1976年にアルバータに戻り、1980年にはアルバータ大学教育学部中等教育部門において、研究方法・教育学及びカリキュラム研究の教授に就任した。2008年に引退し、アルバータ大学名誉教授、ヴィクトリア大学非常勤講師を務めている¹⁰⁾。

ヴァン＝マーネンは、当初は北米のカリキュラム学界で活動を行っており、自ら雑誌“*Phenomenology + Pedagogy*”を創始したほか、“*Curriculum Inquiry*”の Consulting Editor を1976年の創刊以来務めている。また“*Theory into Practice*”などのカリキュラム研究に関する雑誌や、“*Zeitschrift für Pädagogik*”など、様々な雑誌で活躍している。また、2007年に創刊された雑誌“*Phenomenology and Practice*”の Founding Editor を務めているほか、現象学的心理学者であるジオルジ（Giorgi, Amedeo, 1931-）と共に International Human Science Research Conference（人間科学研究国際会議¹¹⁾）を立ち上げたとされている。現象学の方法論について著した『生きられた経験の探究』は、多くの言語に翻訳され、教育学のみならず、看護学や精神医学、心理学の分野で盛んに読まれている。彼自身もその活躍の場を Health Sciences の場に広げ、北欧やオーストラリアでも多くの講演活動を行なっている。また、香港教育学院において教育学名誉博士の称号も得ている。

単著としては、現在までのところ1986年に出版された『教育のトーン *The Tone of Teaching*』、上述の1990年の『生きられた経験の探究—行為に敏感な教育のための人間科学 *Researching Lived Experience: human science for an action sensitive pedagogy*』、1991年に出版された『教えることのタクト—教育的思慮深さの意味 *The Tact of Teaching: the meaning of pedagogical thoughtfulness*』、2014年の『実践の現象学（質的研究の発展） *Phenomenology of Practice (Developing Qualitative Inquiry)*』、2015年出版の『教育的タクト（実践の現象学） *Pedagogical Tact (Phenomenology of Practice)*』、編著に『暗闇の中で書くこと *Writing in the Dark*』、共著に1996年に出版された『子ども期の秘密 *Childhood's Secrets*』、1983年出版の『カ

ナダにおける社会科学 *A Canadian Social Studies*』など多数がある¹²⁾。

2. 現象学的教育学とヴァン＝マーネン

現象学的教育学は、主にドイツ及びオランダにおいて発展したが、ヴァン＝マーネンは両者の影響を色濃く受けつつ、北米のカリキュラム学界において、現象学的方法に基づいたカリキュラム研究を行っている。しかし北米の教育学研究においては、ヨーロッパにおいて発展した現象学的アプローチはほとんど行われておらず、ヴァン＝マーネンは実質的に北米カリキュラム学界に現象学的方法を紹介した人物として、ウィリアム・パイナ（William F. Pinar）によって「カナダ・カリキュラム研究における現象学の父」と呼ばれている¹³⁾。

パイナによると、ヴァン＝マーネンは Hilversum の国立教育大学でランゲフェルトの『理論的教育学入門 *Beknopte Theoretische Pedagogiek*』及びユトレヒト学派の現象学者たちの手になる『人間と世界 *Persoon en Wereld*』を研究していた。そして、アルバータ大学に移った際、彼は自身の指導教官アオキ（Ted Aoki）にユトレヒト学派の現象学を紹介している。それ以降アオキも現象学的な関心を強め、アルバータ大学にカリキュラムにおける現象学的研究北米センター（the Department as the North American center for phenomenological studies in curriculum）を設立した。その後、ヴァン＝マーネンは1970年代にオランダに帰国し、そこでランゲフェルトからベークマン（A. J. Beekman, 1929-）を紹介された。彼はベークマンによる現象学的方法の「民主化」に強く惹きつけられ、1976年にアルバータ大学に助教授として就任したときから、現象学のコースを設け、学生たちに現象学を遂行させている¹⁴⁾。

ヴァン＝マーネンとランゲフェルトとの関係について少し述べておきたい。ヴァン＝マーネンは、カナダに渡り教職に就いた後にアルバータ大学の大学院で現象学的教育学を始めることになったのだが、彼の言によれば、彼が卒業した教育学カレッジはユトレヒト大学と交流があり、カレッジ時代から彼はランゲフェルトらユトレヒト学派の現象学に親しんでいたという¹⁵⁾。その後、研究者として職に就いてからも、毎年のようにオランダに帰国し、ユトレヒト学派の現象学を学んでいた。とくにランゲフェルトに関しては、自宅を幾度か訪ね、「個人的な教師」としてランゲフェルト教育学を伝授されたという。その後北米で現象学を広めた彼は、ユトレヒト大学（Rijksuniversiteit Utrecht）にも何度も招かれて現象学の講義を行っている。その意味で、彼はユトレヒト学派の後継者と位置づけられると考えられる。ユトレヒト学派に関する論文として、「教育の理論化の試み—ユトレヒト学派¹⁶⁾」、およびユトレヒト大学の教育学教授レーベリングの共著「オランダとフランダースにおける現象学¹⁷⁾」を著していることからその意義が見出せる。ただし、筆者のその問いに対して本人は、ユトレヒト学派には哲学的な現象学の影響が弱いこと、方法への問題意識が薄いことを指摘し、ユトレヒト学派と自らのスタンスの違いを強調している¹⁸⁾。

が、管見の限りでは、やはりヴァン＝マーネンの教育学におけるユトレヒト学派とランゲフェルトの影響は色濃いものがあると思われる。ランゲフェルトは、1950年代からオランダのユトレヒト大学の教育学の教授及び教育学研究所の所長を務め、現象学的な志向をもって子どもの人間学的研究を行っていた。彼の現象学は、フッサール（E.Husserl, 1859-1938）の現象学的哲学の展開には全く関与せず、もっぱら方法に限ってそれを使用するものである¹⁹⁾。すなわち、フッサールにおける超越論的主観性への還元には従わず、後期フッサールにおける生活世界（Lebenswelt）の概念と記述的志向のみを取り入れようとしたのである。それは、ランゲフェルトがまずもって教育者として教育学を研究する研究者であることに由来する。そのような研究者にとっては、「いかなる世界もいかなる認識する主観も存在しないかのようなふりをする」、「無関心な傍観者」としての態度は許されない。それゆえ、「この教育学の結果が何らかの積極的效果を生み出すべきであるとすれば、それが還元される場所もまたこの世界に他なら」ず、教育学においては状況における「内在的還元²⁰⁾」が必要とされるのである。

この「内在的還元」の考え方は、ヴァン＝マーネンの教育学の根本をなしていると言ってよいだろう。その上で、彼は「教育的状況 pedagogical situation」というランゲフェルト教育学において最も根幹となる概念から時間性を取り出し、「教育的契機 pedagogical moment」という概念を創出した²¹⁾。

また、ベークマンの現象学の「民主化²²⁾」に強い影響を受け、ユトレヒト学派において行われてきた現象学的記述の方法化に挑み、講義や各国でのワークショップで実践している。上述したように教育学のみならず多くの隣接諸科学においてヴァン＝マーネンの現象学的記述の方法論が用いられている。

さらに、上述のように彼はメンターであるアオキに現象学を紹介し、2人でアルバータ大学を北米における教育の現象学研究の中心に育て上げたとされている²³⁾。1979年にアオキが出版したモノグラフ「*Toward a Curriculum in a New Key*」は、北米におけるカリキュラム研究を再概念化する運動を手助けした。このモノグラフで彼は「一次元的な視野狭窄の影響から我々自身を解き放つことを可能にする新しい方向づけ」として、経験分析的な方法、批判的な探究方法に加えて、意味を探究する状況解釈学的な現象学的記述のアプローチを提示している²⁴⁾。

ヴァン＝マーネンがアルバータ大学を引退し、名誉教授となって以降、キャシー・アダムス（Cathy Adams）がその現象学的研究の跡を継いでいる。また、次男のマイケル・ヴァン＝マーネン（Michael van Manen）が、小児科医としてアルバータ大学において現象学の研究を続けている²⁵⁾。

おわりに

本稿では、ヴァン＝マーネンが教育学を研究するきっかけとなったと本人が言及してい

る『ならず者シスケ』と彼との出会いについて、その来歴との関係を読み解くことをめざした。オランダで育ち、オランダの教師の資格を取得した彼は、カナダに渡ってからも、ユトレヒト学派の影響を強く受けつつ、その現象学的教育学を発展させている。本稿では、彼の現象学的教育学の特性を明らかにすることはできなかった。別稿においてこのテーマに取り組むことにしたい。

注

- 1) アムステルダムとユトレヒトの中間に位置する都市。自治体のウェブサイトによると、オランダの主要なメディアが集まっているため、メディアの街と呼ばれている。(https://www.hilversum.nl/Home/English/About_Hilversum 2019年3月11日閲覧)
- 2) オランダの大衆小説『ならずものシスケ (Ciske de Rat)』は、著者である Piet Bakker (1897-1960) が教師時代に経験した子どもとの出来事を逸話的に描いたものである。1930年代のアムステルダムが舞台となっており、シスケはストリートチルドレンに近い少年として描かれている。現在は、この書物を手に入れるのは困難であるが、1955年及び1984年に映画化されたそれをインターネット上で観ることができる (https://www.imdb.com/title/tt0087060/ 2020年1月13日最終閲覧)。また、ミュージカル作品としても上映されるなど、オランダにおいては著名な作品の1つのようなのである。なお、原本は入手困難なため、ヴァン＝マーネンが英訳したものを使用した。
- 3) van Manen, Max, *Pedagogical Tact: Knowing What to Do When You Don't Know What to Do*, Routledge, 2016, p. 26. (以下、PT と略記する)
- 4) Ibid.
- 5) PT., p. 29.
- 6) PT., pp. 30-31.
- 7) PT., pp. 28-30.
- 8) PT., p. 27.
- 9) 2010年8月28日から29日、氏のヴィクトリア郊外の自宅にて実施した。
- 10) (https://www.maxvanmanen.com/vitae/ 最終閲覧2020年1月14日)
- 11) アメデオ・ジオルジとヴァン＝マーネンによって設立されたこの会議は、1982年のミシガン大学での大会から毎年開催されている。わが国でも2001年には大正大学で開催され、また、2021年7月には東京で40回目の大会が開催予定である。心理学、精神医学、看護学、ソーシャルワーク、教育学など学際的な分野からの参加者が、人間科学としての現象学の研究成果を持ち寄っている。
- 12) 日本語訳は、岡崎美智子・大池美也子・中野和光訳『教育のトーン』ゆみる出版、2003年。村井尚子訳『生きられた経験の探究—人間科学がひらく感受性豊かな“教育”の世界』ゆみる出版、2011年がある。『子ども期の秘密』は、イタリア語、中国語、ドイツ語、ポルトガル語、オランダ語、スペイン語、『生きられた経験の探究』は他に中国語、韓国語、『教育のトーン』はスペイン語、『教えることのタクト』は中国語、スペイン語、ノルウェー語に翻訳されている。
- 13) William F.Pinar, *The History of Phenomenology and Post-Structuralism in Curriculum Studies*: in William F.Pinar, William M.Reynolds (ed.) *Understanding curriculum as phenomenological and deconstructed text*, 1991, p. 238.
- 14) Ibid., pp. 238-242. しかし、ヴァン＝マーネンは、バークマンがエスノグラフィーに偏重しすぎている点に関しては批判的であるという本人の言がある。
- 15) わが国でも翻訳が出されている『病床の心理学 *Sick in Bed*』が、彼が現象学を始めようとしたきっかけになった本であると言う。実際、彼のワークショップや大学院での授業ではヴァン＝デン＝ベルグのこの本が必ず使用されている (ヴァン＝デン＝ベルグ著、早坂泰次郎他訳『病床の心理学』現代社白鳳選書、1975年)。
- 16) Max van Manen, *An Experiment in Educational Theorizing: The Utrecht School*, in: *Interchange*, Vol.10, No.1, 1978-1979, pp. 48-66.

- 17) Bas Levering and Max van Manen, Phenomenology in the Netherlands and Flanders, in Anna-Teresa Tymieniecka (ed.) *Phenomenology World-Wide: Foundations - Expanding Dynamics - Life - Engagements: A Guide for Research and Study (Analecta Husserliana)*, Kluwer Academic Press., 2003, pp. 274 – 285.
- 18) ヴァン＝マーネン本人作成の履歴書 VITAE (2011) および2010年8月28日から29日にかけてカナダ、ピクトリアのヴァン＝マーネンの自宅において行われた筆者との個人的な会話を基にした。
- 19) Langeveld, M.J./Danner, H., *Methodologie und 'Sinn'-Orientierung in der Pädagogik*. München 1981, SS95 – 96. (山崎高哉監訳『意味への教育—学的方法論と人間学的基礎』玉川大学出版部、1989年、193頁)。
- 20) M.J. ランゲフェルド著、和田修二監訳『教育の理論と現実』未来社、1972年、147 – 148頁。
- 21) 「教育的契機」については、以下の拙論を参照されたい。村井尚子「ヴァン＝マーネンにおける『教育的契機』の概念に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』2001年、47巻、134 – 146頁。
- 22) 村井尚子「『子どもという人間』への理解（1）トン・ベークマンの現象学的教育学」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』2008年、7巻、163 – 178頁。
- 23) William F. Pinar, William M. Reynolds, Patrick Slattery, Peter M. Taubman, *Understanding curriculum: an introduction to the study of historical and contemporary curriculum discourses*: P. Lang, 1995. (Counterpoints: studies in the postmodern theory of education; vol. 17), p. 44.
- 24) Aoki, *Toward a Curriculum in a New Key*, 1979, pp. 4 – 7. (ただし入手困難なため、Pinar, 1995, pp. 228 – 229を参照した)。
- 25) アダムスに関しては、(<https://www.ualberta.ca/education/about-us/professor-profiles/cathy-adams> 2020年1月14日閲覧)。マイケルについては (<https://www.ualberta.ca/john-dossetor-health-ethics-centre/about/people/faculty/michaelvanmanen> 同日閲覧)。